

まえがき

平成17年度に実施された本校の研究の中から、5名の個人研究と各学年の総合学習の取り組みの4本の計9本を研究紀要第35集としてまとめました。ここにご報告いたします。

まず個人研究について、簡単ながら私自身の個人的な読後感を述べさせていただきます。

佐々木和枝先生とは副校長の一年間を一緒に過ごしました。管理職としての先生しか存じ上げなかったので、ポリマーを教材とするとても詳細な授業記録を一読し、プロの理科教諭としての佐々木先生を確認しました。身の回りのことから関心を引き出し、ポリマーの説明や実験を試みる授業は、生徒にとって興味深かったことがアンケートから理解できます。同時に諸外国の状況、指導計画、実践の概要、評価と考察という論文構成自体が、管理職としての先生の用意周到さと重なっていることも確認できました。

佐藤先生は、他の個人研究とは異なり、小学校理科授業の歴史研究となっています(ただし、理科という教科名は明治20年代からだそうです)。岐阜県の土岐小学校で教鞭をとっていた三好学(後の東京帝国大学教授、小石川植物園長)の『授業日誌』を素材にし、そこから明治10年代の小学校における理科授業の内容を浮き彫りにするという労作です。一次資料を用いるなど日本教育史研究としてもしっかりしており、思わず襟を正して読み進めるだけの実質をもっています。

秋山先生の数学の図形領域の指導についての論文は、文部科学省から研究開発校としての指定を受けた幼・小・中の連携研究と関わっており、図形の論証が、小学校からの「なめらかな接続」、および、小学校との「適切な段差」の両面からの指導が必要であることを、具体的な授業展開に即して説明しています。生徒から自然に拍手の起こる授業というのは、とてもステキだと思います。

加々美先生の三平方の定理の学習をめぐる授業研究は、「私たちのピタゴラスの定理」をめぐって3,4名のグループに分かれ考える授業です。ピタゴラスの定理を覚えさせるのではなく、何を明らかにするのかという課題設定の段階から生徒たちに任せ、書籍・ビデオ・コンピュータ等を利用して調べ、グループ発表するという、とてもわくわくとする授業展開になっています。

石田先生の金属加工の製作学習の授業記録は、他の個人研究と異なる点として、10年近くの長いスパンをふまえている点に特色があると思います。これまでに授業で行ってきたこと、指導要領の影響などを振り返りながら、今回の製作学習を計画、実施し、その成果を生徒のアンケートに基づいて考察しており、過去との連続と発展、今後の展開という長いスパンの授業研究は、今後ますます重要になると思います。

総合学習関連のものは4本あり、いずれも、生徒の自主性を重んじたもので、他の附属中学

校、あるいは他の中学校における総合学習のモデルになりうる内容を備えています。

第1学年総合カリキュラムは、教員間で大テーマを設定しながらも、生徒祭、校外学習総合（高尾山）、クラスの枠をはずしての「新たなるステップ」、「訪問学習」のいずれもが、生徒たちで考えさせる内容となっています。私は生徒祭の展示を参観し、高尾山に同行し、また2年次の林間学校にも参加しましたが、このような丁寧な、かつ生徒の自主性を重んじるプログラムで展開されていたことを再確認しました。

第2学年は、一年次を振り返り、他人との関係を築くことや共生というテーマをさらに発展させる必要性を確認し、今年度の方針づくり、組織作り、自然保護などの6グループ編成、活動のまとめと中間発表という流れをまとめています。発表会は項目ごとに評価され、得点率が示されているので、生徒にとってはとても貴重なグループ学習の機会だったことが分かります。

那須林間学校の実施報告も、第2学年の総合学習の一環であり、資料をもとにしたまとめになっています。

第3学年総合学習は、「社会のために、今自分たちができることを考え、行動する」という目標を2年次までにどの程度達成できたかを確認した上で、6月の学年発表会および卒業に向けてのプロジェクトの経過をまとめています。私は、3月の修繕プロジェクトに1回だけ参加し、花壇の整備を手伝いましたが、このプロジェクトが3年間の総合学習のまとめとして、学校に残そうプロジェクトの一つであったことを再確認した次第です。

せっかくの個人研究、総合学習の記録なので、今後は、まとめる段階での相互の意見交換や、紀要として発行された後での合評会が行われることを期待します。先生としての力量は、指導案だけでつくものではなく、実際の授業を丁寧に振り返ることにより、また教科を越えた先生集団での話し合いを通してつくように思います。研究紀要の実践的な活用方法について、機会があったら先生方とディスカッションしたいと考えています。

また、個人研究の1本程度は、実際の授業の中での生徒とのやりとりを再現する授業研究論文があってもよいと期待しています。ねらいを指導案でまとめ、授業を展開し、生徒のアンケートで達成度を確認するというこれまでの方向を大事にすると同時に、生徒は実際の授業の中で、その場での反応という形で、先生の授業を評価しているだろうし、また先生自身も、生徒のその場での反応をすぐさま感じ取り、即時に授業の中で生徒に返しているのが授業の実態だからと思うからです。幼・小・中の連携研究で授業研究を行っているので、その幾つかを紀要にまとめていく方向も考えられるかもしれません。

平成18年9月

お茶の水女子大学附属中学校校長

三 輪 建 二